



第93号  
平成20年8月号

子育て施設課

電話 0823-25-3144

## 子どもの事故

子どもの事故は、幼児期の死因順位の第一位を占めており、9歳未満における事故の全死亡に占める比率は約3割です。子どもの事故の重要性は、その予防可能性にあります。健診時などに事故防止のための保健指導を積極的に実施すると、その後事故の発生が減少することがわかっています。

年齢別に不慮の事故による原因を見てみると、1～4歳では、約4割が交通事故、3割が溺死、1割が窒息。5～9歳では 約半数が交通事故、3割が溺死、1割弱が火災となっています。

交通事故の内訳は、当然、歩行者が7割（1～4歳）から6割（5～9歳）と最も多くなっていますが、5～9歳の交通事故の2割強が自転車に乗っているときに、交通事故に会っています。自転車に子どもを乗せて運転する際は、バランスを崩しやすいため細心の注意が必要です。現在、子どもを乗せる専用の自転車の開発が行われていますが、コスト的に問題があります。

### ○ 自転車の事故

転倒による頭部打撲が多いことから ヘルメットの着用を行う必要があります。

### ○ 歩行者の事故

事故を完全に防ぐことはできませんが、交通ルールを遵守することは最低限必要なことです。また、とっさの行動にも注意を払う必要があります。ボール遊びのボールが車道に出たときや道路を隔てた反対側にいる子供に声をかけるなど、危ない状況について親として日頃から注意しておく必要があります。

### ○ 溺水事故

2歳の誕生日までは 浴槽での溺死が多く、溺死事故の8割を占めるが、5歳以降では、小川や湖、海での溺死が8割近くを占めるようになります。浴槽での溺死は、必ずしも浴槽に水が充満している場合に生じているわけではなく比較的浅い水位でも事故は起こっています。現在の浴槽の多くは滑り

やすく、子どもが浴槽に落ちても自分で顔を水中から上げることができないため起きている場合が多くなっています。浴槽の水位が低いからといって安心することなく子どもが勝手に浴室に入らないように注意することが大切です。池やため池の周りは、草などで滑りやすく一度落ちてしまうと藻などで一人では這い上がれないことが多いことから、危険な場所には近づかないように日頃から注意しておく必要があります。また、家族でボートなどに乗る際には、ライフジャケットを着ける等の配慮が必要です。

### ○ 窒息事故

2歳未満児までは多く見られ、原因は、豆類を食べ驚いた拍子に気管に入ったり、ビニール袋や風船、細い紐による窒息が多いですが、3歳以降は少なくなります。

### ○ やけど

2歳未満児では、テーブルクロスを引っ張りテーブルの上に置いてあった味噌汁などを頭からかぶったり、熱いストーブを触るなど不用意な行動によるものから、3歳以降は、食事の際に熱いものを、こぼしたり花火や火遊びによる熱傷のように能動的な行為による事故が増えてきます。

3歳を過ぎた子どもの事故は、母親だけの気配りだけでは防  
止できません。社会全体による環境整備と子どもへの安全教育  
が必要となります。



ほけんだよりは、呉市のホームページでもご覧になることができます。

アドレス <http://www.city.kure.lg.jp/~kodosise/hoken.html>